



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレ ター 第635号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン  
ターニューズレター 第635号. 京大東アジアセンターニューズレター  
2016, 635

ISSUE DATE:

2016-09-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216535>

RIGHT:

2016 年 9 月 5 日発行 第 635 号

## CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ.....	2
アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ.....	3
日本の日常医薬品人気の秘密 福喜多俊夫.....	4
読後雑感:2016 年 第 21 回 小島正憲.....	7
【中国経済最新統計】 .....	14



## 「中国経済研究会」のお知らせ

---

2016年度第5回（通算第59回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016 年 10 月 18 日(火) 16：30－18：00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階  
みずほホール AB

テーマ： 「人民元国際化のプロセスについて」

報告者： 蓋艶梅(北京行政学院副教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月19日（火）、5月17日（火）、6月21日（火）、7月19日(火)

後期：10月18日（火）、11月15日（火）、12月20（火）、1月17日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（[liu@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:liu@econ.kyoto-u.ac.jp)）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



## アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ

---

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター支援会

### アジア自動車シンポジウム 2016

# 新興国における部品現地調達を考える

—部品国産化ライフサイクルを一つの視座として—

■京都会場 2016 年 11 月 5 日(土) 13 時

京都大学経済学部三番教室(法経東館 2 階)

■東京会場 2016 年 11 月 7 日(月) 13 時

京都大学東京オフィス(新丸の内ビルディング 10 階)

#### 13:00-13:20 挨拶

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅 純二郎  
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点長 丸川 知雄

#### 13:20-14:40

問題提起: 部品国産化ライフサイクル 京都大学 経済学研究科 教授 塩地 洋

#### 14:40-15:10

サプライチェーンの複雑化と深層の現地化 東京大学 経済学研究科 教授 新宅 純二郎

#### 15:30-16:00

日系サプライヤーの現地化基本戦略 立命館大学 経営管理研究科 准教授 佐伯 靖雄

#### 16:00-16:30

現地 2 次サプライヤーの技術能力—深化を制約するか 桜美林大学 経営学研究科  
教授 井上 隆一郎

#### 16:30-16:50

総括コメント 東京大学 社会科学研究所 教授 丸川 知雄

#### 16:50-17:00

閉会挨拶 京都大学 経済学研究科 准教授 田中 彰

#### 17:10-18:30

懇親会 参加費 2000 円(支援会会員は無料)

参加の御申込は、塩地 [shioji@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:shioji@econ.kyoto-u.ac.jp) 宛に、①会場名、②氏名・所属、③懇親会出欠を御連絡ください。シンポジウムの参加費は無料、懇親会は 2000 円です。ただし支援会会員は懇親会も無料です。

東京会場は定員 90 名、京都会場 200 名です。お早めにお申し込みください。

なお東京会場は会場が小さいため、御申込は支援会会員のみとさせていただきます。

支援会入会につきましては塩地までお問い合わせください。

## 日本の日常医薬品人気の秘密

---

一般社団法人大阪能率協会常任理事、順利包装集団董事（在上海）  
福喜多技術士事務所所長、東アジアセンター外部研究員  
福喜多俊夫

中国網は4月2日、5月26日と立て続けに「中国人が日本の薬を大量購入する理由」について報じ、同じ効能の薬（中国製）が中国でも手に入るのに、なぜ日本で爆買いするのかその理由を分析している。中国網の記事や私の周辺の中国人の友達の話から「日本の日常医薬品人気の秘密」を探ってみた。

### 1. 中国にも日常医薬品は数多くある

中国にも医者処方箋なしで購入できる OTC 医薬品（一般医薬品）を販売している薬局は沢山あり、風邪薬や下痢止め、傷薬など各種大衆薬を販売している。上海では華氏大薬房、上海恒徳大薬房、上海中法大薬房が有名。また、大きなショッピングセンターにはドラッグストアチェーン屈臣氏（ワトソンズ）が店を出しており、大衆薬や化粧品を販売している。中国でも医療保険制度が徐々に充実してきており、公務員、国有企業、一般私営企業に勤めている人は病院へ行って薬をもらうが（中国は医薬分業になっていないので、病院内の薬局で薬を買う）、病院はいつも混んでおり（中国には歯科、鍼灸医、漢方医以外開業医はいない。外国人向けのクリニックはあるが保険適用外。したがって、大きな病院へ行くことになり、いつも混んでいる）、また、個人負担が通常4割で、風邪薬をもらうためには大体100元（約1800円）程度必要となるので、私の友人達は風邪くらいでは病院へ行かず、買い置きの大衆薬（葛根湯など）で済ませることになる。薬店には感冒清熱顆粒（熱さまし）や感冒止咳顆粒（咳止め）など各種症状に応じた風邪薬が売られている。消化器系では安胃片などの胃薬もある。私は上海でギックリ腰になったことがあるが、サリチル酸系の貼薬も売っていた。

中国ではまだ、いわゆる保健薬を常用する人は少ないが、薬店には「天然維生素C」などビタミン剤も並んでいる。

このように中国でも日常医薬品は各種購入出来るのに、なぜ日本の医薬品の人気が高いのだろうか？ 私の友人達には日本の薬の愛用者が多いが（彼らはいずれも中流階級に属している）、彼らの説明では、①日本の薬は安全（中国には偽薬が多いが、日本では偽薬が流通しない仕組みが出来ている）②対象に

応じてきめこまかく分類されている ③子供用の薬が充実しており、子供が飲みやすい味つけがなされている ④パッケージに使用法や薬効が詳しく書かれている（日本語が読めなければ意味がないが） ⑤よく効く

このように日本の大衆薬に絶大な信頼感を寄せている。また、日本の大衆薬が中国人に広く知れ渡ったのにはネット情報の寄与が大きく、日本への旅行者がネット情報を実践したことがそれに輪をかけている。

## 2. 大手ポータルサイト、搜狐（SOHU）の寄与が大きい

2014年10月、中国の大手ポータルサイト、搜狐（SOHU）が「日本で買わなければならない12の神薬」を紹介した。これは以下のようなもので、日本旅行ブームと相俟ってこれらの薬は爆買の対象となった。

- ・目薬「サンテボーティエ」（参天製薬）
- ・消炎鎮痛剤「アンメルツヨコヨコ」（小林製薬）
- ・液体絆創膏「サカムケア」（小林製薬）
- ・冷却剤「熱さまシート」（小林製薬）
- ・頭痛薬「イブクイック」（エスエス製薬）
- ・消炎鎮痛剤「サロンパス」（久光製薬）
- ・外皮用薬「ニノキュア」（小林製薬）
- ・L-システイン製剤「ハイチオールC」（エスエス製薬）
- ・便秘薬「ビューラックA」（皇漢堂製薬）
- ・口内炎治療薬「口内炎パッチ大正A」（大正製薬）
- ・女性保健薬「命の母A」（小林製薬）
- ・のど薬「龍角散」（龍角散）

## 3. 日本の日常薬人気は衰えず、中国医薬専門家は医薬業界に反省を促す

中国網（5月26日）は日本の華字紙「新華僑報」を引用して、2014年の春節から現在にかけて、訪日中国人観光客の購入リストに入る人気商品は変化を続けているが、日常の医薬品や保険製品は変わらず人気は衰えないと報じた。私の友人の娘さんは年数回日本に来ているが、その度にスーツケースの半分は自分用、家族用、友人用の薬と化粧品で埋まるという。友達と日常的に微信（ウィチャット）で情報交換し、口コミで商品を選択しているようだ。友人達の使用経験から人気の薬や化粧品は変化しており、私が最近頼まれるものは「龍角散スティック」（ピーチ味が子供に人気）、「ケシミンクリーム」、「ムヒ」、「メンソレータム薬用リップスティック」など。これからは「虫よけパッチ」がリク



エストに入るに違いない。

中国全国人民代表大会の代表で、中国工程院院士、中国中医科学院の張伯礼・院長は3月14日、今年の春節（旧正月、今年は2月8日）期間中に、多くの中国人観光客が日本で薬を「爆買い」した現象に言及、「中国の製薬企業はその理由をよく考え、サービスを全面的に改善して、国民が安心して薬を使用できるようにしなければならない」と取材に答えた際に指摘した。（人民網3月16日）。

張氏は「中国の医薬産業が発展するにつれ、薬品の質、基準は大きく向上した。しかし、課題も残り、中国人が国外の薬品のほうが信頼できると感じる結果になっている。実際には、中国人が国外で『爆買い』している薬品は全て普通の薬で、中国にもある。しかし、国外の薬品は信頼性があり、ブランド性もサービスもいい。そして、パッケージも美しく、分かりやすい説明書がついている。そのため、私たち中国医薬の専門家も匠の精神を持ち、薬品の品質を向上させると同時に、きれいなパッケージ、分かりやすい説明書などを準備し、サービスを全面的に改善して、国民が安心して薬を使用できるようにしなければならない。そして、逆に外国人観光客が中国で薬品を『爆買い』する状況を作らなければならない」と、中国医薬の専門家として、このような現象に対する残念な思いを示した。

以上

## 読後雑感:2016 年 第 21 回

---

29.AUG.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事  
株式会社小島衣料オーナー  
東アジアセンター外部研究員  
小島正憲

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1. 「70 歳！」     | 2. 「“孤独” のすすめ」 |
| 3. 「渡る老後に鬼はなし」 | 4. 「恐山」        |
| 5. 「遺品は語る」     | 6. 「お墓の大問題」    |

### 1. 「70 歳！」 五木寛之・釈徹宗対談 文春新書 2016 年 8 月 20 日

副題 : 「人と社会の老いの作法」 帯の言葉 : 「終わらざる老いの日々 いかにして生きようか」

五木氏は84歳で、釈氏は55歳であり、その差はほぼ30歳。本書の題名を見て、私はこの二人の、「70歳」をテーマにした対談だと思った。来年70歳になる私は、この題名に強く引きつけられ、ただちに購入し読んでみた。しかし「70歳」というのは、「戦後70年という日本のこと」であり、本書は、特別に70歳という老人一般をターゲットにしたものではなかった。残念ながら本書から、二人の独創的で建設的な死生観を学ぶことは難しい。それでも五木氏は本書で、従来の彼の超高齢社会の死生観を、少しずつではあるが進展させており、読む価値はある。

五木氏は、「歴史的にみれば、大量の死者が出た時代は、戦争、疫病、大飢餓といった、いわばアクシデントのようなことが原因となっていました。しかし、これから迎えるのは大量の“自然死”という事態です。かつて人類が体験したこともないような、おびただしい死の時代を迎えることになる。そのとき、やはり死生観を持っているかいなかで、本人はもとより、送り出すほうの心構え、さらには、その後の社会にまで影響をおよぼしてくるようになります」、「いまの日本が世界から注目されていることがあるとすれば、ひとつは使用済み核燃料をどう処理するかという問題。もうひとつは使用済み人的資源をどう処理するかという問題です」と、書いている。「言い得て妙」というところだろう。

五木氏は、「人生観とか死生観にしても、若い人たちと壮年期の人たち、高齢期にさしかかった人たちでとでは違ってはいなくてはいけない。これからは何



事も、三段構えで考えていかなきゃいけないんじゃないか」、「30歳前後で亡くなったイエスの宗教は若々しい。夢があり、愛があり、希望がありロマンティックで情熱的です。イスラム教は社会人の宗教だという感じがします。ムハンマドは隊商交易に従事し、アラビア各地の遊牧民族を信者として率いたといえますから。ブッダの死は80歳ですから、仏教はまさに老年者のための宗教ということになりますね」、「青春の宗教、中年の宗教、老年の宗教という考え方でもできるんじゃないか」と、面白い考え方を披露している。超高齢社会に突入した現在、宗教だけでなく哲学や文学、芸術なども三段構えになる必要があるのかもしれない。たしかに若者と老人の感受性は、まったく違うのだから。

また五木氏は、「自分が死に直面したとき、正直に言って、納得して喜んで死んでいけるかどうかはわかりません。ただし、これからは訪れる死ではなく、進んで受け入れる死の時代に入らざるを得ないだろう、そういう予感を抱いている。私自身、進んで死を受け入れるにはどのようにするのがいいかと考えたりするんです。シベリアへ行って、ツンドラの中で凍死するのはどうだろうかなんてね」、「死を受け入れるのではなくて、死を自ら切り開くというところまで行きつくと思います」、「周りに迷惑をかけず、滑稽な印象も悲劇的な印象も与えずに、淡々と自分で世を去って行くにはどうしたらいいか。これはわれわれの世代にとっては、切実な問題です」と語っている。

それに対して釈氏は、「死に関する自己決定のために、死生観を持つことが求められている。そこでとまどっている人も少なくないのでしょう。1980年代に、臨死体験ブームというものがありました。いまは終末活動ブーム。そうやって現代人は一生懸命、死に向き合おうとしているんですが、なかなか解決には至らない」と書いている。

また五木氏は、「この先、若年層と老人層の“階級対立”が激化してくるかもしれません。“若肉老食”や“老人駆除法の制定”という言葉も目にしました」と書き、それらの事態を回避するためのアイディアとして下記を上げている。

- ・五木：国に多額の寄付をした老人には、どしどし叙勲などの名誉を与える。
- ・釈：智慧や財力のある高齢者と、成熟期だからこそ登場してきたタイプの若者をうまくつなぐ回路があれば、いいモデルができるんじゃないか。
- ・五木：かつて白樺派の武者小路実篤たちが「新しき村」なんていう理想郷をつくりましたが、そういうふうに高齢者のための新しき村を日本の各地につくるわけにはいかないのでしょうか。

副題 : 「世間の目なんか 捨てちゃえ 捨てちゃえ」

帯の言葉 : 「寂しさを誤解する現代人 “おかしな” 世間を馬鹿にして  
“最高の自由” を得る生き方」

今年で80歳を迎えるひろさちや氏は、本書の「はじめに」で、「“孤独”というのは、世間に迎合しない毅然とした生き方の姿勢を意味します。だから、むしろプラス価値だと思います。したがってわたしたちは、“孤独”を楽しんで生きたほうがよいのです」と書き、本書の最後で、「私は80歳、もうそんな老人になったのですから、わたしはできるかぎり世間から身を引こうと思っています。そして孤独に、寂しく生きるつもりでいます。あまり世間に遠慮なく、孤独を楽しんで生きるつもりです」と、書いている。つまり「“孤独”を楽しんで生きよ」と勧めている。ただし、私がいつも強調しているように、「孤独をこよなく愛せ」とまでは、言い切っていない。

ひろさちや氏は本書で、孤独について、「孤独を感じる人は孤独であり、孤独を感じない人は孤独でない」、「人間は孤独です。みんな悲しみに耐えて生きています。みんな寂しさを耐えて生きています」、「孤独というものは、時として最上の交際である」と書き、仏教の教義を引用し、それを簡潔明瞭に解説しています。ただし、仏教をあまりにもわかりやすく解説しているため、仏教の神髄を誤解させかねない部分もあるように見受ける。

ひろさちや氏は、「わたしは大勢の人々に迷惑をかけました。お詫びを申し上げねばならない人がたくさんいます。でも、この世においては、真のお詫びはできません。謝罪をしているようで、自己弁護になることが多いのです。だからわたしはお詫びをお浄土へと延期したいと思うのです」と書き、現世での謝罪のあの世への先送りを勧めています。

### 3. 「渡る老後に鬼はなし」 橋田壽賀子著 朝日新書 2016年8月30日

副題 : 「スッキリ旅立つ10の心得」

帯の言葉 : 「スッキリ大往生! 家族、友人、名誉欲、財産、持つから鬼になるんです」

本書は、かつての売れっ子脚本家、橋田壽賀子氏の「老後」にかこつけた自伝的書物である。橋田氏も91歳になり、さすがに最近では脚本依頼がなくなってきたので、本人もようやく終活に本腰を入れたという。本書で橋田氏は、自分には「ないものづくし」であるといい、「葬儀なし。出世欲、名誉欲なし。仕事なし。友なし。親なし。恋愛なし。夫なし。親戚なし。子なし。後悔なし」と書いている。たしかに、これだけきれいさっぱりないと、さぞかし「スッキ

リ旅立てる」ことだろう。

橋田氏は本書で、「私はもう十分すぎるほど生きました。それも生きたい時代に。戦争を経験できたことで、必要以上に欲張ることもなかったし、鍛えてもらった、人生観を植え付けてもらったと感謝しています。その後の平和な時代も経験させてもらいました」、「いかに世話にならずに死ねるか、それから“この子を残して大丈夫かしら？”と心配せずに死ねるか。理想の最期をどう迎えるかは、実は人生の最後にして最大のハードルなのかもしれません」、「私も、生きているにはあまりにも過酷な状態で、なおかつ本人が望むなら、日本にも安楽死という選択があってもいいと思うんです」、「日本で無理なら、せめて法で認められているスイスに行って、“明日死なせてください”と私は頼みたい。そういうふうに死にたいのです」と書いている。

#### 4. 「恐山」 南直哉著 新潮新書 2012年4月20日

副題 : 「死者のいる場所」 帯の言葉 : 「人は死んだらどこへゆくー“恐山の禅僧”かく語りき」

本書は4年ほど前に発行されたものである。当時、「人は死んだらどこへゆく」という帯の言葉につられて買ったのだが、そのまま書庫に眠らせてしまっていた。盆休みに、終活の一環として書庫の棚卸しをしているときに、本書が出てきたので、読んでみた。南氏の「恐山の解説」は、面白い。近いうちに、私も恐山に行き、その鬼気迫る風景を見て、南氏の説法を聞き、「人は死んだらどこへ行くのか」を直接教えてもらいたいと思う。ただし、特段、会いたい死者がいるわけでもないので、イタコに頼んで死者と対面したいとは思っていない。

著者の南氏は、恐山を管轄する曹洞宗菩提寺の住職代理であり、曹洞宗の本山永平寺で20年間も修業を続けた立派な僧侶である。そして南氏は縁あって恐山菩提寺に勤めることとなった。その後、彼は持ち前の進取の気性で、恐山についての種々の現象に立ち向かい、それを解明し、達者な文筆力でそれを世に知らしめたのが、本書である。本書で南氏は、「“恐山のイタコ”はいない」、「恐山の心霊現象はあるとも言えない、ないとも言えない」、「恐山はパワーレススポットである」、「恐山というのはあくまで器なのです。それは火口にできた土地である。きれいな湖があつて温泉が出る。そこにはこの世とは思えない異様な風景が広がっている。その風景に魅かれて、やがて多くの人が集まってきた。それから何か信仰のようなものが芽生えた、と考えるのが自然でしょう」などと書いている。これらを読んで、私は恐山の本当の姿が少しわかったよう

な気がした。あとは自分の目や耳で確かめてみたいと思っている。

ただし本書における南氏の、「死の思想」は、少し分かりづらい。南氏は死について、「生活には全く役に立たないが、あるいは有害でさえあるけれども、人間が存在するためには決定的な意味を持つものが一つだけある。それは何か。死です」、「死とはあらゆる意味を無効にしてしまう欠落です。死者こそがこれを意識させる。私が恐山に来てつくづく思ったのは、“なぜみんな霊の話がこんなに好きなのだろうか”ということです。それは人間の中に根源的な欲望があるからです。そしてその欲望は不安からやってきます。つまり、霊魂や死者に対する激しい興味なり欲望の根本には、“自分はどこから来てどこに行くのか分からない”という抜きがたい不安があるわけです。この不安こそがまさに、人間の抱える欠落であり、生者に見える死者の顔であり、“死者”へのやむにやまれぬ欲望なのです」と書いている。

南氏は現代の仏教が葬式仏教に堕していることを憂い、本書の最後を、「死者を想い、死を語る作法をもう一度引き込みなおさなければならない。そのとき、宗教は、仏教は、どのような作法を示しうるだろうか。あるいは、それ以外の何が、示すだろうか。そして、霊場恐山は、いかにそこにありえうだろうか。私にいま、結論はない」と結んでいる。

また南氏は、「感謝でも謝罪でも、その人が生きているうちにしておかなければ、それは後悔という形で永遠に残ってしまいます」と書いている。これは上掲のひろ氏とは、真逆のアドバイスである。どちらを選ぶかは、当人次第であるが、私は南氏の主張に同感であり、生前に決着をしておいた方がよいと思う。

## 5. 「遺品は語る」 赤澤健一著 講談社+α新書 2016年7月20日

副題 : 「遺品整理業者が教える“独居老人600万人”・“無縁死3万人”時代に、必ずやっておくべきこと」

帯の言葉 : 「多死社会の真実! 5000事例に学んだ“誰もが一人で死ぬ時代”の処方箋」

遺品整理業を営んでいる赤澤氏は、「誰もが一人で死んでいく時代に、“最期はきれいさっぱりと”とお考えの方に、遺品整理の現場からのアドバイスを差し上げたい」として、本書を書き始めている。赤澤氏によれば、「遺品整理サービス業界自体も、ここ数年、急成長している。ある調査によれば、遺品整理など片付け受託の市場規模は800億円、潜在的ニーズは3800億円に達すると推計されている。きちんとしたデータはないが、全国で5000社ほどの業

者が存在し、大手引っ越し業者をはじめ他業種からの参入も相次いでいる。その背景には、空き家の増加や独居高齢者の増加を生んでいる日本社会の構造的問題があるのだが、それと同時に、当面の現実として、親が亡くなったときの遺品が子どもにとってたいへんな壁として立ちのかるからでもある」という。

赤澤氏は本書で、「一般の方にはあまり知られていないが、家の中で遺品を整理し、捨てる準備をする作業までは特別な資格は必要ない。しかし、遺品整理後に必ず出てくるゴミを捨てるためには、廃棄物処理法に従う必要がある。具体的に整理するためには、自治体家庭ゴミの収集ルートに出すか、許可を得たゴミ収集業者を呼ぶ必要がある。ゴミ収集業者を呼ぶ際には、一般廃棄物を運搬する許可を取得している業者を選ばなければならない。産業廃棄物運搬の許可だけを持っている業者や、あるいは無許可の業者だった場合は法律違反ということになってしまう」ので、業者選びには注意が必要と書いている。なるほど。

ただし本書での赤澤氏の指摘には、新しい切り口は少なく、これまでの終活本に書かれていることがほとんどである。それでも、自分で整理することを諦めた人から、赤澤氏の会社に、「遺品整理の生前予約」が増えて来ているという話には、思わず頷いた。私も一生懸命、身の回りを整理しているが、遅々として進まない現状であり、たしかに「遺品整理の生前予約」をしておきたいような心境だからである。

## 6. 「お墓の大問題」 吉川美津子著 小学館新書 2016年8月6日

帯の言葉 : 「あなたの悩みすべて解決！」

超高齢社会の次は、多死社会の到来である。当然、そこでは葬儀やお墓の問題が起きてくる。本書は、それを見越して「お墓の大問題」を、社会に提起している。

私も長く唯物論者として生きてきたので、この期に及んで、宗教にすがろうとは思っていない。実母が亡くなったら、ただちに墓と仏壇を始末しようと考えている。今、墓のある場所は、わが社の近くで、歩いて15分ほどのところにある。しかし長男は東京、長女は北海道にいて、墓参りなどはまず不可能。次男はわが社に在籍しており、近所に住んでいるが、わが社とて、本社を移転、あるいは倒産という事態に巻き込まれないと言い切れない。さすれば、私の死後、この墓を訪れる人はまったくいなくなるだろう。今まで私は、子どもたちに迷惑をかけたくないので、漠然と「墓じまい」をしようと考えていた。ところが、この本には、「墓じまい」には平均で200万円ほどかかると書かれ



ている。たしかには墓地は所有しているわけではなく、使用させてもらっているだけなので、更地にして返さなければならない。中古の墓を再利用してもらうわけにはいかないから、当たり前の話だ。なお、お寺によっては離壇料を払わなければならないこともあるようだ。墓に比べて、仏壇は、引き取り業者も多く、「即日引き取り」をうたっている業者もあり、問題はなさそうである。位牌などの処分もまとめて業者に頼むつもりだ。

墓と仏壇を処分してしまうと、残るのは遺骨の問題だ。本書では、いろいろな方法を提起しているが、私に納得のいくものはない。お墓の中にある実父の遺骨は、永代供養墓に納める。実母が亡くなったら、遺体を完全焼却し、引き取るものをすべてなくすことを試みてみたい。もし成功したら、私も遺言で、この方法を指定しておきたい。

吉川氏は葬儀について、「葬儀は死にゆく人にとって、最初で最後の一度きりの体験であり、周囲の反応もそれぞれに異なる、生き方や価値観、信仰などさまざまな要素も複雑に絡み合う。“その人が望む、その人らしい最期を迎えられること”が看取りの理想だとすれば、葬送はその死とどうかかわっていくべきか、残された側が考えなければいけない役目ではないか。現代の高齢者はそれ以前の世代に比べて、各世代、各個人がそれぞれ独立し、自衛意識を持っているように思う。他者に依存することなく、自分自身で完結できる方法を模索し、“葬儀は不要”と語る人も多い。これは“他人に迷惑をかけたくない”という意味で、一見潔く見えるが、その態度は次の世代への引き継ぎを放棄したともとれる。この関係が次世代まで影響を及ぼすとしたら皮肉な事態になってしまうと言わざるを得ない」とも書いている。



## 【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sub>米</sub> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3 月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4 月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5 月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6 月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7 月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。